

「国際社会の主役は地域社会ですよ。昭利村に移住した理由を聞かれた時、私はまずこう切り出す。「農山村から都会へと向かった人々の流れが逆転する日は、間近に迫っています。現代は『地域主権』の時代なのですから」と。

私は「地域」という言葉の意味を三層に考えている。「地方」「大地」「地球」の三つの「地」を重視した生きる場が、私の言う「地域」である。食文化や住環境が良い「地方」。土を耕し、自然と調和して「大地」に生きる。それは、国家や民族や宗教の差異を超えて「地球」に生きる自覚を持った人々の生きる場でもある。

こうした意味で「地域」を考える時、昭利村がいかに魅力的な場所であるかが分かってもらえると思う。しかし、村人に私の本心を理解してもらうには、まだまだ多くの時間を必要としているようだ。長野県内で新聞記者をしていた私は、昨夏開設された喰丸文化再学習センター取材するため、初めて訪れて昭利村の美しさに圧倒された。森林の緑の美しさ、



1993(土) 7.20.

透明な水の美しさ、素朴なたずまいを残す景観の美しさ、村人の助け合いの心の美しさ。

「日本が近代化と高度経済成長の過程で失った美しさがこの村にはある。日本の原風景がここにある」と感動したまましばらく立ち尽くした自分の姿が、今でも鮮明に脳裏に焼きついている。

グローカル 文化の胎動

藤森 弘



ののだろうか。自信と誇りを失っている苦しい胸の内が、「こんな」という言葉の裏側に垣間見える。

ひどい人は、「こんな村に来るやつはろくでもないじゃないか」となる。結果、「あいつは会社で失敗してクビになったんだろ」「女に手を出して問題になったんだろ」「借金取りに迫られて来たんじゃないか」と奇妙なうわさ話がひとり歩きを始める。

喰丸センターの仕事を手伝うことになり、三月下旬に転居して、自分の感動を村人に説明するのだが、残念なことに本心がなかなか伝わらない。「なぜ、こんな村に来たのだね」と多くの村人が私に質問する。自分たちの住んでいる村を指して「こんな」と表現するのは、ちょっとおかしなことだ。若者のほとんどが村外に出たまま帰らないので、卑下してい

やないか」と奇妙なうわさ話がひとり歩きを始める。そんな話を耳にすると、私は怒りが込み上げてくるよりも村人の心の空虚さが心配になる。「こんな村」にしたのは、ほかならぬ村人自身だからだ。「こんな」気持ちになるのも無理のないことかもしれない。マスコミは「過疎化、高齢化、豪雪の三重苦」というレッテルをばり、

村の主産業である稲作は自由化の波にさらされて青息吐息。昨年は子供が三人しか生まれず、出生率の急激な低下が、村の未来に暗い影を投げかけているのも事実だからだ。「こんな村」とほやきたくなる気持ちも分からぬではない。

「廃村の危機」を高高に唱える村人も多いが、果たして本当に危機的な状況なのだろうか。「否、絶対にそんなことはない。時代は変わったのだ」と私は叫びたい衝動にかられる。再生への胎動が脈打っているのを、ひしひしと感じるからだ。

現代日本の高齢化問題や環境問題がクロ一ズアップされていることはだれでも知っている。生産効率優先の産業社会から排除された高齢者や心身障害者に優しい社会、自然と調和した心豊かな社会。そんな日本の未来像を昭利村に投影してみると、私は不思議と心が明るくなるのだ。

グローバル(地球規模)に考えて、ローカル(地域)に行動する「グローカル文化」の胎動が、この昭利村に生まれていると感じるのは、私だけなのだろうか。(昭利村喰丸・フリーライター)